鎮守の森だより

NPO法人社叢学会ニュース
第60号
2012年11月1日

発足から10年　重要性を増す社叢学会の活動

社叢学会は、平成14年(2002)5月の発足以来、様々な活動を継続してきた。中でも定例研究会は、関西(奇数月)、関東(偶数月)を中心に、開催回数は100回を超えている。テーマは社叢や森林が直面する問題点や歴史的な変遷、都市景観に果たす役割など多様で、自然科学系、人文科学系の研究者が意見を交わしあう社叢学会ならではの場となっている。今後さらに内容の充実を図り、より多くの会員、一般市民の参加を促していきたい。

平成15年からは、里山や人工林とは異なった管理が必要な社叢を適切に育成し、未来につなぐ役割を果たす社叢インストラクターの養成を開始し、植生調査など実習中心のセミナーは今年で8回を数える。平成20年からは社叢インストラクター資格認定試験を実施し、すでに28人の社叢インストラクターを輩出、様々な場面で活動している。特に震災被災地での社叢復興支援事業では、昨年の緊急調査、今年の現況調査に同行し、貴重なデータを作成するのに大きな役割を果たした。

また、今年度は会員の要請をうけて、水度神社(京都府城陽市)で参道樹林帯の調査を実施した。水度神社参道は京都府から景観保全の指定を受け、城陽市の「みどりの軸」ともされる一方で市道にに指定されていることから車道としての通行も多く、落枝などによる事故も発生するなど、市街地に典型的な問題を抱えている。ここでも社叢インストラクターが樹種の同定や樹高、枝張りなどを調査し、適正な管理に向けての報告を行った。

平成17年には愛知万博(愛・地球博)に出展。鎮守の森空間「千年の森」の造成と、シンボルタワー頭頂に「天空鎮守の杜」を植栽、来場者に社叢の清々しさと雄々しさをアピールした。

さらに東日本大震災に際してはいち早く復興支援事業の実施を決定、現地調査団の派遣のほか、現地見学会を開催。昨年11月には当学会名誉顧問のドナルド・キーン氏を迎えてシンポジウムを開催するなど、被災地の社叢復興に向けて精力的に事業を展開している。

発足から10年、社叢を取り巻く環境は厳しさを増しているが、一方で社叢が維持する生物多様性や、東日本大震災で避難所としての役割を果たしたことなど、再評価の機運も高まってきており、発足当初の理念である「諸学の垣根を取り払って」活動する社叢学会の役割はますます重要なものとなっている。

樹木調査をする社叢インストラクター

次回予告【第53回関西定例研究会】

※ 日時・会場にご注意ください！

◆日　時：2012年12月1日(土)　13:30～15:30
◆場　所：コープ・イン・京都（京都市中京区柳馬場蛸薬師上ル井筒屋町411）
◆テーマ：社叢から明らかになった照葉樹林の実態
◆講　師：服部　保（兵庫県立大学 自然・環境科学研究所教授・
兵庫県立人と自然の博物館 自然・環境再生研究部長）
◆ｺﾒﾝﾃｰﾀ：渡辺弘之（社叢学会理事・京都大学名誉教授）

第52回　関西定例研究会　報告

2012年9月29日
（於　法然院 本坊）

森のセンターの活動と善気山の保全

講　　師：久山慶子（フィールドソサエティー・法然院森のセンター事務局長
京都府立林業大学校客員教授　）
森の案内：久山喜久雄（フィールドソサエティー・法然院森のセンター代表）
ｺﾒﾝﾃｰﾀ：渡辺弘之（社叢学会理事・京都大学名誉教授

法然院と二人三脚　私たちの活動は1985年に始まったが、最大の理由は法然院の森との出会いだった。法然院がこの恵まれた環境を次代に活かしていきたい、寺を核とした開かれた活動を目指していきたい、森林資源に意味を見出していきたい、人や生き物が共に生かしあう環境を作りたいという明確な理念に基づいて支えてくれていることが大きな力となっている。自然保護とはどういうことかという大きな命題が突きつけられた時代でもあり、森から学ぶことを出発点に、まず足元から学ばなければならないと始まったのがこの森の教室の活動だ。

法然院の裏には東山三十六峰の第十四峰に数えられる善気山がせり出していて、シイの豊かな森にクスやスギ、ムク、エノキなどの様々な樹木が緑を創出している。法然院の地所は約11haで、観察など様々な活動ができる森が広がっている。バス停から歩いて来ることができるという条件が整った森だ。

森の教室の活動を開始してみると、子供たちの大人と全く違う感覚で森を喜んでいる姿を目の当たりにすることになり、1989年に森の子クラブを始めた。森の中に入ると、子供たちには、笑顔と共に楽しみたいというエネルギーが出てくるし、その中から連帯感や探究心、好奇心が出てくる。それは大人にとっても、森の環境学習活動が何かのきっかけになっているという勇気を与えてくれている。

1993年に法然院が「共生き堂」（通称：法然院森のセンター）を建設し、それを機に森の教室と、森の子クラブの活動を継続していくために、市民側の組織としてフィールドソサエティーが発足した。

森のセンターではこの森の生態系の豊かさを伝える展示を行っている。哺乳類のみならず両生類、爬虫類も多様で、様々な樹木と植物、昆虫類や節足動物、そして菌類など肉眼ではみられない世界が感じられる。自然の生態系の尊さ、培われた時間の長さとその果てに我々も人間として命をいただいて生きているということを森から学ぶことができる。社寺に守られて自然環境を学ぶことが自然にできるというところが社叢のすばらしいところだと思う。

森づくりに着手　2003年からは次世代に向けて学びの森を作り出していくことを目的に「観察の森づくり」という森の手入れを始めた。法然院の森も、薪炭利用などで人が入っていた頃にはもっと里山らしい風景が広がっていただろうが、暗い所にしか生えないような樹種が混みあい絡み合って藪化が進み、本来ならば多様な木々が生えていたはずの所が荒れてきたことが、観察するだけの活動から森づくりを入れるに活動へと舵をきった一番の理由だった。

法然院の地所は善気山と多頂山というふたつの尾根にはさまれた谷あいで土壌は軟らかく落葉樹も育ちやすい。ここを整理するためには、間伐をしなければいけないのだが、どういう森にするかという見通しがなければ間違った方向に手入れしてしまうかもしれないので、専門家にしっかり判断してもらい、管理区分をつけたうえで観察の森づくりを始めた。

境内のすぐ裏の森には照葉樹林が広がっている。照葉樹林はいったん損なわれると、明るい環境で芽生える樹木に取って代わられてしまう。麓は人の手の入った二次林でありながら、自然林に近い様子も観察できる。スギ、ヒノキ、モミなどが広葉樹の中に混ざって生えている。また基盤が固いため、シイが自重を支えるために板根を作っているというように、それぞれの樹木の特性が想像できる。そのため間伐を少なくし、安全に歩くための道作りをするにとどめ、社叢ならではの遷移を自然にみていこうということになっている。さらに、その上には先人が社寺仏閣の改築や修繕に備えて残してきたとも思われるヒノキの群落があるのだが、シイが入り込みヒノキがまっすぐ伸びられないという状況になってしまっており、専門家に枝打ちをしてもらった。次世代にこのヒノキの意味を引き継いでいかなければならないと思っている。

法然院の地所には尾根が二ヶ所あり、アカマツが多く見られたが、使われなくなって土壌が富栄養化したところにマツクイムシの被害が出てマツが減ってしまった。マツは大文字の送り火をはじめ、文化的にも非常に大切な樹木なので、尾根らしい姿に回復できたらという計画をたて、マツの実生の生育を促すために尾根での間伐も行った。明るくなったところでは実生が育ってきているが、これから、10年目ぐらいをきちんと越せるか、大きな課題を感じている。

社叢を引き継ぐ　社叢が現代に持つ様々な意義を確認し、それを次世代に引き継いでいくことが必要だ。特に専門家の深い知識と、市民を結ぶ役割をもっと強めなければいけないと感じている。すでに失われた樹種も多くあるということも含めて、森の保全、方向修正を提案していきたい。そのためには、まず、多くの人に参加してもらわねばならないと思う。

暮らしの感覚がエネルギーも使い放題という、たががはずれたままで進んできた時代で、それが生き物としては正しいことではなかったということを多くの人々と共感しなければ森の保全活動は広がりをみない。大勢が参加できる仕組みづくりが必要だと思う。

さらに、雑木の森で大量の枯れ枝や落ち葉、間伐材が行き場を失っている状況を目の当たりにして、単に薪ストーブなどだけではなく、木質バイオマス発電を含め、根幹から自然エネルギーに転換するための資源にもしないといけないという意識を持っている。

第52回関東定例研究会　報告

2012年9月16日・17日
(於:岩手県下閉伊郡山田町)

三陸山田祭の見学と社叢の復旧支援

コーディネータ：薗 田　稔(社叢学会副理事長・京都大学名誉教授)
茂 木　栄(社叢学会理事・國學院大學教授)

9月三連休の2日間、岩手県三陸の山田町を訪ねた。目的は、陸中山田八幡宮祭いわゆる山田祭の見学及び周辺の神社・ご神木等の調査および復興支援である。昨年は東日本大震災のため行えなかった山田祭が１年ぶりに再興されるということで、少しでもお手伝いができればという思いで向かったのだが、我々の手を必要とするまでも無く、大盛況であった。

1日目(16日)山田八幡祭：連日9月中旬とは思えぬ真夏のような気温が続いていたため、北国に涼を求める気持ちで出かけたのだが、祭りの熱気のみならず、隣接する宮古市でも33℃を記録する猛残暑であった。山田八幡宮から下ってかつて街のあったところに設えられたお祭り広場では、神楽舞をはじめ民俗芸能が次々に披露され、ほとんど日蔭のない会場で、暑さを忘れ、熱心に舞い、見物する人々の姿があった。

順路を示したマップとお囃子の音を頼りに、神輿を追いかけて歩きだす。街の中には大津波の被害にあった家の基礎部分だけがあちこちに残されている。ＪＲ山田線の線路は途中で中断され、今は列車が来ることはない。大通りでは家々の前に神輿を迎える小さな祭壇が設けられ、家族、縁者が団欒しながら神輿の一群がやってくるのを待っていた。会話に耳を傾けると、震災で散り散りになった人たちの、久しぶりの再会を懐かしみ、近況を語り合う声が聞こえてきた。

神輿は、虎舞、獅子舞、鹿舞を引き連れて、時間をかけて各家を回ると、いつしか日は傾き、祭りはクライマックスに向かう。氏子と見物人で埋め尽くされた境内では、神輿の宮入り待ちかまえる。頭上にはいくつもの大漁旗がゆれている。すっかり日が落ちて、明りに火が灯る頃、狭くて急な階段をゆっくり確実に上がりながら神輿が境内に入ってきた。歓喜の声と熱気に包まれた境内で、お宮入りを惜しむように、何度もじらしながら、神輿はお宮の中へ鎮まった。大盛り上がりのうちに祭りは終わったが、地元の方に言わせると、まだまだこんなものではないと言う。復興への強い思いが感じられた。

2日目(17日)：周辺社寺の社叢視察：被災地の寺社めぐり：最初に向かった関口神社は、神仏習合色の残る神社である。境内の入口に、樹齢200年を超える桜の大木が、囲まれた杉の木に枝を絡ませながらやっと立っている。樹木医の診断によると、内部はすでにスポンジ状態で、根元にはキノコが生えていた。過去の境内整備で根を傷つけてしまったことが原因と思われるという。関口川を溯ったところにある奥宮(関口不動)は、かつて修験修行の場であったが、今では訪れる人は少ない。人の手が入っていない森の奥へ車を走らせると突然、朱塗りのお宮が現れた。拝殿の頭上は切り立つ崖で、中腹に幣帛が奉られている。その手前には剣先を天に向けた剣がいくつも刺さっている。川の水は透き通り、木々は瑞々しくのびやかに生茂り、丸みを帯びた石造の阿吽の一対がこの聖域を守る。拝殿の脇には鍾乳洞の入口があり、暗闇に火をともすと、蝙蝠が驚いて飛びだしてきた。

海沿いにある杉山神社は、高い堤防があるため、海水面を見ることはできない。接近する津波を早期に目視することはできなかっただろう。残されたお宮の屋根瓦は半分崩れおち、周辺に残された建物はない。この日、杉山神社は例祭で、例年であれば漁師町の祭にふさわしく神輿が海に渡御するのであるが、大津波にさらわれてしまったため今年は渡御されなかった。

山田を離れ、釜石市鵜住地区に向かった。常楽寺は前回定例会で茂木栄教授から報告のあった「津波絵馬」が奉納されていたお寺である。倒壊寸前だった建物はすでに取り壊され、柳田國男の石碑と鐘つき堂が残るばかりであった。大イチョウは一部葉を枯らしていたが、根元はしっかりしていた。さらに海浜近くの鵜住神社周辺の森は、こんもりとした緑を回復していた。震災当初に炊き出しが行われた鵜住神社は、震災後、津波避難場所に指定された。次に向かったのは、火災被害にあいながら、お社を守り抜いた小鎚神社である。未だ周辺に再建された建物はなく、境内のすぐ手前まできていた津波と火災の痕跡が伺えた。

JR宮古駅近くの高台にある横山八幡宮は、被災当日はこの杜を目指して急な階段を上り、大勢の人が避難してきた。お宮を開放し、祭りのために備蓄してあった蝋燭や炭を提供し急場を凌いだことを、権宮司が熱心に語ってくれた。

前回報告されたお宮を実際に訪問し、改めて災害時に神社や鎮守の杜の果たした役割の大きさを感じる。被災地から学んだことを身近な環境に生かしていきたい。

（文責・渡邊節子）

book book book book book book

事務局に届いた書籍をご紹介いたします。

『小国大輝論　西郷隆盛と縄文の魂』上田篤著　藤原書店　@2,200(税別)
『景観の生態史観　攪乱が再生する豊かな大地』森本幸裕編　京都通信社　@2,200(税別)
『日本の空間システム　～神社の参道空間～』岡野眞著　美巧社　@1,429(税別)
『いっしょに探そう野山の花たち　花色と形でわかる野草図鑑』　馬場多久男編著　信濃毎日新聞社　@2,000(税別)
『つなみのえほん　ぼくのふるさと』くどうまゆみ文・絵　市井社　@1,200(税別)
『イネ科　ハンドブック』木場英久・茨木靖・勝山輝男著　文一総合出版　@1,600(税別)
『照葉樹　ハンドブック』林将之著　文一総合出版　@1,200(税別)

事務局から

● 今年度の会費未納の方には振替用紙を同封いたしました。何かと多端な折とは存じますが、社叢学会は会費で運営しております。ご理解とご協力をお願い申し上げます。なお、12月末日までに入金の確認ができない場合は、「鎮守の森だより」等をお送りできなくなりますので、悪しからずご了承下さい。ご退会をご希望の場合は、お手数ですが、会員番号とお名前をご記載の上、Fax･Mailでその旨、お知らせ下さい。

編集後記

60号かぁ。。。ってことはワタシも勤続10年だよ。永年(?!)勤続の金一封は、、、ナイよね。いいんです、そんなこと。

しかし！　ここで私はお～きな誤解を晴らしておきたい！　「鎮守の森だよりね、フジオカさんのとこだけですわ、ちゃんと読むの、後は難しいから」って。ほとんどフジオカさんですから！　今号だって、関東報告以外はぜ～～んぶワタシ！　レイアウトソフトを駆使してちまちま作っているのもワタシ！　外注なんかしてません(できません)から！

「え、毎日いたはるんですか？　週2～3回かと」って。月曜から金曜まで出勤してますから！10時～4時までというサラリーマンにはあるまじき時間と勤務態度ダケド、なが～～い夏休みは取るけど、暑～い時と寒～い時はとっとと帰るけど、毎日来てますから！　(藤岡　郁)

次回予告【第53回関東定例研究会】

◆日　　時：12月15日(土)　14：00～16：30
◆場　　所：國學院大学・渋谷キャンパス120周年記念1号館3階1304教室
(東京都渋谷区東4-10-28)
◆テ ー マ：ニホンジカの高密度化による生態系への影響
◆話題提供：大 橋　春 香(東京農工大学農学府・農学部・産官学連携研究員)

研究発表者募集！

テ ー マ：社叢に関する理論的研究
社叢の保存・拡充に関する実践的調査研究
発表時間：20分(報告15分＋討論5分)

応募締切：2013年3月末日必着
応募要領：住所・氏名を明記の上、発表内容を300～400字にまとめ、E-Mail、FAX、郵便で本部事務局に送付

発行人　社叢学会事務局　〒604-8115京都市中京区雁金町373番地みよいビル303号
TEL075-212-2973　FAX075-212-2916
URL http://www.shasou.org　E-Mail　shasou@ams.odn.ne.jp

社叢学会関東支部　〒368-0041　秩父市番場町1－1　秩父神社社務所内
TEL080-1514-5032　E-Mail　shasougakkai@hotmail.com
(当面、このアドレスでお願いいたします)